

研究課題：歯周病の進行と職業階層間との関連性について

研究者名：入江 浩一郎

所 属：愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座

【目的】歯周病は、プラークによって誘発する炎症性疾患である。近年、収入、教育そして職業のような社会経済的要因によっても、細菌に対する歯周組織の免疫応答の影響を受けることが明らかになってきた。今回、我々は歯周病の発症と職業階層間との関連を解明するために、日本人労働者において5年間の前向きコホート研究を行った。

【方法】愛知県名古屋市内および近隣市に居住し、2001年4月～2002年3月の期間に、一般財団法人愛知県健康増進財団で健康診断を受診した19,633名を対象とした。それらの調査対象から、2006年4月～2007年3月の期間同様の健康診断を受診した7297人を調査対象とした。そのうち、ベースライン時に健康な歯周状態で、20歳以上でかつ残存歯が20本以上であった3390人〔男性2848人（平均年齢 41.0 ± 9.77 歳）、女性542人（平均年齢 41.6 ± 10.46 歳）〕を5年間追跡研究をした。本研究における職業階層の分類については、厚生労働省による職業分類（1999年）に基づいて、アンケート形式で調査した。口腔内診査は、Community Periodontal Index（CPI）を用い、歯周病の発症と職業階層間との関連を、cox比例ハザードモデルを用いて検討をした。

【結果】5年間の追跡後、歯周病を発症（CPI3または4）したのは、男性899人（31.6%）およびの女性129人（23.8%）であった。専門的・技術職と比較すると、管理・役員職では1.69、運輸・通信従事者では1.44のハザード比であった。しかし、潜在的交絡因子の調整を行うと、職業間との有意差は認められなかった。一方、交絡因子調整後、歯周病発症したもののうちCPI4になった男性においては、専門的・技術職と比較した場合、技能工・製造業は2.89、販売従事職は2.57のハザード比であった。対照的に、女性においては交絡因子調整後は有意な差が認められなかった。

【結論】日本人労働者の前向きコホート研究を行った結果、男性において職業階層によって、歯周病の発症に影響を受けることが明らかになった。本研究から、仕事の勤務形態が歯周病の発症に影響を及ぼすことが示唆された。